BOOGAMANIA

第一部

001序章
002兆候
003発症
004連絡

湖南徹

BOOGAMANIA（001）：序章

国際奇病学会年次報告書　20××年×月（抜粋）
　著者：野愚痴秀世

BOOGAMANIAの研究促進に関して
（その1）

　BOOGAMANIAは、非常に稀な疾病であるが、その深刻度は癌やエイズ等とは比較にならない。発症例は僅かながらだが増加傾向にあり、早急に世界規模での対策が講じられるべきだが、様々な要因により対策はおろか研究すら実施されていないのが実情である。
　この状況を打開する為に、世界各国の医療研究機関は結集して各国政府にこの疾病の重大性について訴え、研究を促進し、病原の特定や治療法の確立に邁進し……

国際奇病学会年次報告書　20×〇年〇月（抜粋）
　著者：野愚痴秀世

BOOGAMANIAの研究促進に関して
（その4）

　BOOGAMANIA。
「ブーガマニア」と発音します。
　これは何を意味する言葉なのでしょうか。
　教えてあげましょう！

NUTS!
MAD!
CRAZY!
WHACKO!
IDIOT!

……という意味です！

これは、日本語にすると、馬鹿とか、アホとか、脳足りんとか、間抜けとか、頓馬とか、唐変木とか、スットコドッコイとか、プンプクリンとか、アンポンタンとか、チンチクリンとか、プンプンプンとか、ポレポレポレとか、フニャフニャホニャとか、ポッテポッテとかといった意味になります！

非常に不快な単語です！

糞みたいな単語です！

こんな単語を覚えても何の意味も無い、とあなたは思うでしょう。

残念ながら、ここまで読んだ時点であなたは立派なBOOGAMANIAなのです。

おめでとうございます！

BOOGAMANIAの人生を全うして下さい！

……BOOGA！

追記：

野愚痴秀世博士はBOOGAMANIAを発症したと診断され、現在はある施設（注1）で隔離状態にあるとされる。

注1：アメリカ合衆国保健社会福祉省所管のCDC（疾患予防管理センター）の管理下にある特殊病院とされるが、詳細は不明。

BOOGAMANIA（002）：兆候

金田金子は、自分や、自分の生活に大変満足していた。
彼女は、幼少の頃は『可愛い子だ』と褒められた。
当然である。
可愛かったからだ。
一〇〇人に『可愛いか？』と訊けば、二〇〇人が『可愛い』と答える。
一〇〇人に『可愛くないだろう？』と訊くと、五〇〇人が否定する。
それ程可愛かった。
成長するにしたがって、『絶世の美少女に』と絶賛されるようになった。
当然である。
絶世の美女だったからだ。
一〇〇人に『絶世の美女か？』と訊けば、三〇〇人が『絶世の美女だ』と答える。
一〇〇人に『絶世の美女じゃないだろう？』と訊くと、七〇〇人が否定する。
それ程の絶世の美少女だった。

一部では、『年商数十兆円の大企業グループ――ゴウマン・インターナショナル・グループ――の会長令嬢だから、何卒もてはやされるのさ』という否定的な声も挙がっていた（事実、上記の質問を会長の意にそぐわない形で答えてしまった者の中には地獄の鬼ですら目を背ける拷問を受けて死亡してしまった者もいる）。

が、会長令嬢である事を知らない者でも彼女を前にすると興奮のあまり鼻血を流してしまったり、心筋梗塞になったり、肺塞栓症になったり、蜘蛛膜下出血になったり、脳梗塞に陥ったり、統合失調症になったり、熱中症になったり、認知症になったり、痴呆症になったり、花粉症になったり、吃音症になったり、減圧症になったり、原爆症になったり、脂質異常症になったり、ブルセラ症になったり、トキソプラズマ症になったり、エキノコックス症になったり、レプトスピラ症になったり、不眠症になったり、自閉症になったり、飛蚊症になったり、氷食症になったり、腋臭症になったり、脊髄小脳変性症になったり、場面緘黙症になったり、心身症になったりする事が多いので、否定の声は所詮下民による妬みだろう。

彼女の凄さは容貌だけではない。

スポーツは万能。どのスポーツを選んだとしても、その道に進めば頂点を極められる、と評された。

テニスだろうと、卓球だろうと、バレーボールだろうと、水泳だろうと、ゴルフだろうと、走り高跳びだろうと、ボクシングだろうと、フェンシングだろうと、テコンドーだろうと、サッカーだろうと、ラクロスだろうと、マラソンだろうと、フットサルだろうと、槍投げだろうと、グレコローマン・レスリングだろうと、セパタクローだろうと、太極拳だろうと、射撃だろうと、カヌーだろうと、イングリング級ヨットだとうと、バドミントンだろうと、トライアスロンだろうと、馬術だろうと、アメリカンフットボールだろうと、綱引きだろうと。

学問にも長けた。

全国能力試験では首位を取らない事がニュースになる程で、それも一度だけだった。

学問の道を進めば、ノーベル賞も、ウルフ賞も、ガウス賞も、フィールズ賞も、クラフォード賞も、ガードナー国際賞も、慶應医学賞も、ボーヤイ賞も、ネヴァンリンナ賞も、春季賞も、ラマヌジャン賞も、ゲーデル賞も、アニー・J・キャノン賞も、ベアトリス・ティンズリー賞も、ジャンスキー賞も、ローブナー賞も、シドニー・ファーンバック賞も、ゴードン・ベル賞も、ノーバート・ウィーナー賞も、イグノーベル賞も、ブルーリボン賞も当たり前の様に受賞出来る、と評された。

成人し、年頃になった彼女には、世界各国から数え切れない程の男性が言い寄って来た。
彼女のビーナスの様な美貌に惹かれた者。
彼女の莫大な資産に惹かれた者。
彼女の天使の様な美声に惹かれた者。
彼女の極超ウルトラ・メガ・スーパー・ダイナマイトの肉体に惹かれた者。
そんな男共を、彼女は適当にあしらってきた。
当然である。
彼女は世界屈指の大企業グループーーゴウマン・インターナショナル・グループーーの会長令嬢。
そんじゃそこらの男のものになる訳がない。

『……日本中の女性が憧れるアイドルスター？　はあ……。私はあなたなんかに憧れてはいませんけど。テレビドラマで一度だけ拝見しましたが、大根でしたわ。あの程度の演技でよく俳優なんてやってられますわ。大体、背が低過ぎません？　シークレットブーツやヘアスタイルで身長をかさ上げされても……』

『……大病院院長の御曹司？　将来は病院を継ぐ？　でも、安井予医療大学では赤点ばかりだったと聞いていますわ。あなたのお父様が学費をきっちり納めたから医師になれただけでしょ？　安井予医療大学程度の四流医大でもズル抜きで卒業出来ないお馬鹿さんには興味ありませんの』

『……会社社長で年収は一〇億円？　それ、何か自慢ですの？　一〇億円なんて、お小遣いみたいなものですわ。私なら三日で使い果たせます。残りの三六二日は何をすればいいんですの？　そんなはしたないお金について、よく堂々と語れますわね。みっともない』

『……国際的な投資会社の社長？　数兆円を動かせる？　でも、所詮他人のお金じゃありませんか。他人のお金は、結局は他人のお金ですわ。自分のものでない、他人のお金を挙げて自慢するの、て恥ずかしくありません？』

『……欧州のメジャー自動車メーカーの社長？　長年赤字に喘いでいた会社を黒字転換させた？　凄いですわね。研究開発費を大幅に削減し、従業員の給料を成果主義の名目でカットし、下請けを締め上げ……。それだけやって黒字にならなかったら、寧ろおかしいですわ。そもそも、そんな下等な手段による黒字をいつまで維持出来るんでしょうね。研究開発費を削減した結果、開発力は落ちていて、売り上げは既に頭打ち状態ですし』

……等々、彼女の厳しい基準を満たせる男性はなかなか現れなかった。
一生巡り合えないのでは、と思い始めていた時である。
金田金太郎と出会った。
長身で、適度に筋肉質で、しかも銀幕のスターがどれもブ男に見えてしまう程のルックス。
一〇代の若さでIT関連のベンチャー企業を立ち上げ、たった一〇年で時価総額数十兆円の総合的な大企業グループ――ネズミコー・グループ――に育て上げている。
頭脳明晰で、容貌も完璧。
穏やかな性格で、成り上がりのベンチャー企業家にありがちなギラギラした、いやしい側面もない。
――これこそ私が求めていた理想の男性よ！
金子は、金太郎に控えめながらも着実に接近した。
金太郎も、金子の様な美人で大金持ちの女性を求めていた。
交際から約一年。
二人は結婚した。

結婚式は、総費用が数百億円とされる程の盛大なものになり、日本中のVIP（首相や大臣、各界の大物）は勿論、海外のVIP（各国の王族や、国家元首や、宰相や、マフィア幹部や、トング幹部）も続々と出席した。
挙式後、二人は土地代だけで数百億円と言われる敷地に建てられた大豪邸に越した。
そこで、彼女は一層優雅な生活を始めた。
グルメに、エステに、宝飾品に、自動車に、乗馬に、旅行に……。
一日最低一億五〇〇〇万円は浪費。
週末の二日には一〇億円を使うのも珍しくなかった。
それでも金子本人の資産や、夫金太郎の資産にとって屁の様な出費である。
金田金子が、自分や、自分の生活に大変満足しているのも当然である。

「……今日の予定は何ですの？」
　妻の問いかけに、金田金太郎はスケジュール帳を確認する事無く――完璧な記憶力を持つのでスケジュール帳を必要としない――、即座に答えた。
「今日はパリで商談だ。LVMH社とね。買収する事になると思う」
　と言うと、マイセンの特注カップからコロンビア産のスプレモ・コーヒーーー実は無能バイヤーが掴まされたフィリピン産の低級豆のコーヒーーーを一口飲んだ。
「パリで一泊するんですの？」
「いや、我が社が開発した極超音速旅客機で直ちに帰る。あれならパリから日本までほんの数時間だからな。お前から一晩以上離れるなんて考えられない」
　金子は笑顔になった。
「私もですわ。あなたと一晩でも離れ離れになるなんて考えられない。あなたがパリで一泊するくらいなら一緒に付いていきます」
　金太郎も笑顔になった。
「その必要はない。俺はお前から絶対離れないよ。……BOOGA」

　金子は首を捻った。
「……何と言いました？」
「だから、その……、俺はお前から絶対離れないよ。……BOOGA」
　金子はますます首を捻った。
「あの……。『ブーガ』て何です？」
「『ブーガ』？　そんな事言ってないよ。……BOOGA」
「『ブーガ』、て言ってるじゃないですか」
　金太郎は笑った。
「『ブーガ』？　俺がそんな変な事言う訳ないだろう。そろそろ会社へ向かう。昼にはパリに向かう。夕方には戻って来る。待っててくれ。……BOOGA」
『ブーガ』て何度も言ってるじゃないですか、と金子は指摘しそうになったが、断念した。
　追及するまでの事ではない、と判断したのだ。
　ただ、一抹の不安を感じずにはいられなかった。

BOOGAMANIA（003）：発症

　IT企業グループ――ネズミコー・グループ――の若き総帥の金田金太郎は、ロールスロイス・ファントムVIリムジンで、東京都中央区にあるネズミコー・グループ本社ビルへと向かっていた。
　黄金に光るロールスロイス・ファントムVIリムジンは、全長六〇四〇ミリ、全幅二〇一〇ミリ、全高一七五〇ミリ、重量二七一九キロの曲線を活かした優雅で威風堂々とした姿を最大の売りとしているイギリス製の超高級車だ。
　金田金太郎の自慢のリムジンである。
　この車輌を手に入れるのに、とにかく苦労した。
　二年前。
　金田金太郎は、この図体のでかい車輌の写真を『世界の名車・旧車大図鑑』で見て、欲しい、と直ちに思った。
　そこで、製造元のロールスロイス社に発注した。
　ロールスロイス社から回答を得た。
『残念ながら、この車種は一九九〇年に生産を終了しております。現在はロールスロイス・ファントムという別の車種を生産しております』

金田金太郎は、ロールスロイス社から送られてきた豪華で分厚いカタログを開いた。
ロールスロイス社が現在誇る超高級車ファントムが載っていた。
全長六〇八四ミリ、全幅一九九〇ミリ、全高一六三四ミリ、重量二六七〇キロの、モダンながらも威圧感あるスタイルの車輌である。
そこに転がっている成金なら、『古臭い格好のロールスロイス・ファントムVIリムジンよりこちらの方が断然良い』と思っただろう。
金田金太郎は激怒した。
俺が欲しいのはこんな中途半端な格好の車じゃない、俺が最初に欲しいと言ったものを寄越さずに全く別のものを売り付けようとするとはどういう事だ、と。
金田金太郎は、金はいくらでも出すからロールスロイス・ファントムVIリムジンを再生産しろ、と再発注した。
ロールスロイス社は、応じられない、と回答した。

『現在のロールスロイス社はロールスロイス・ファントムVIリムジンを生産していた頃のロールスロイス社とは直接関係がありません。現在の親会社であるBMWがいわば社名だけを引き継いで成立した全く別の会社と言ってもいいでしょう』

――別の会社だと？　どいつもこいつも屁理屈を並べやがって！

憤慨した金田金太郎は、BMW本社に出向き、四〇億ドルの大金を押し付けてロールスロイス社を買収した。

金田金太郎は改めてロールスロイス・ファントムVIリムジンの再生産を命じた。

全株を掌握したオーナーの命となれば、会社として反対出来ない。

ロールスロイス社はロールスロイス・ファントムVIリムジンの再生産を渋々決定した。

金田金太郎は、ロールスロイス社とベントレー社が同じ会社で、ベントレー社がターボーチャージャー付きの、若干スポーティーなモデルを生産している、とどこかで聞いていた。

そこで、ロールスロイス社に注文を付けた。搭載するエンジンはベントレーのターボ付きのにしてくれ、と。

ロールスロイス社から回答があった。

『以前、ロールスロイス社とベントレー社は同じ会社でしたが、現在ベントレー社はフォルクスワーゲン・グループに属しています。完全な別会社になっております。分割前のロールスロイス社の本流を組むのは、現在のロールスロイス社より、クルーの工場を保有している今のベントレー社と言って良いでしょう。ともかく、諸事情により、ベントレー社からエンジンの供給は受けられません』

金田金太郎はまた憤慨した。

ベントレー社に対し、ロールスロイス社にエンジンを供給するよう、申請した。

ベントレー社は供給を拒否した。泥沼と化した会社分割問題を漸く乗り越えて事業が軌道に乗り始めたのに、今更供給を要請されても困る、と。

金田金太郎は、フォルクスーワーゲン本社に出向き、四五億ドルの大金を拠出してベントレー社を買収した。

金田金太郎は改めてベントレー社に対しエンジンの供給を命じた。

全株を掌握したオーナーの命となれば、会社として反対出来ない。

ベントレー社は、ロールスロイス社にエンジンを供給した。

ロールスロイス社は、エンジンの供給を受け、金田金太郎が望むロールスロイス・ファントムVIリムジンを再生産した。

……そういう訳で、金田金太郎は、もう誰も手に入れられない筈の新品のロールスロイス・ファントムVIリムジン――しかも元にはなかったターボ搭載エンジンのもの――を手に入れられた。
八五億ドルも拠出して。
金田金太郎は大いに満足した。
どんな会社であろうと金さえ出せば平伏して自分の要望に応えるのだ、と。
黄金のロールスロイス・ファントムVIリムジンは、ネズミコー・グループ本社ビルの裏にある、総帥専用の出入り口前で止まった。
白人のショファーが後部座席のドアを開ける。
金田金太郎は、ドアが開けられるのが当たり前だというふてぶてしい態度で下車した。
高さ一二〇〇メートルメートルあるネズミコー・グループ本社ビルに入る。
スイスに本社を置くシンドラー社が技術の粋を結集して特別に開発した総帥専用の超高速エレベータで、最上階――――八〇階――にある総帥室まで上がった。
総帥室はビルの最上階を占める広大な空間だ。贅の限りを尽くしたロココ様式とバロック様式とアンピール様式の装飾品により、サングラスをかけていないと目がチカチカする。

　身長一八五センチの黒人女性秘書――オベッカ・イッテバカリ――が、出迎えた。
「総帥、お早うございます」
「ああ。今日の予定は？」
「トヨタ・モーターズ会長との会合です。ネズミコー・グループへの完全子会社化についてですね」
　金田金太郎は鼻息を荒くした。
「そうか。三河の阿呆商人共が俺に頭を下げに来るのか。どんな奴も金を握った者に頭を下げるのだ。阿呆となれば尚更だ」
「おっしゃる通りです、総帥」
「その後、パリに飛ぶんだな？　……BOOGA」
　オベッカ・イッテバカリは首を傾げた。
「何とおっしゃいました、総帥？」
「だから、パリに飛ぶんだな、と言ったんだ。……BOOGA」
「総帥、すみません。あの……、『ブーガ』て何ですか？」
　金田金太郎は眉間に皺を寄せた。

「妻もそんな事言っていたな。俺は『ブーガ』なんて言っていない。……BOOGA」
「でも……、またおっしゃったじゃないですか」
　金田金太郎は顔を真っ赤にした。
「『ブーガ』なんて言ってない、と言ってるだろうが！　……BOOGA。何故俺が『ブーガ』なんて馬鹿な事を言うのだ？　……BOOGA」
　オベッカ・イッテバカリは、困惑の表情を隠さず、
「で、でも、総帥。また『ブーガ』を繰り返して……」
　金田金太郎の顔面は、体内の血液全てが首から上に集結したかの様に赤黒くなった。
「俺は『ブーガ』なんて言っていない！　……BOOGA。何故どいつもこいつも……。　……BOOGA。俺を馬鹿にしているのか？　……BOOGA」
「ば、馬鹿になんてしてません……」

　金田金太郎は、広大な総帥室を、檻の中の熊の如く旋回し始めた。旋回の速度が、一歩ごとに増していく。
「俺は『ブーガ』なんて言っていないぞ。……BOOGA。そんな馬鹿な事を言う訳がないぞ。……BOOGA。何故俺がそんな馬鹿な事を繰り返し述べるのだ？　……BOOGA。『ブーガ』なんて何の意味もないではないか。……BOOGA。……BOOGA。……BOOGA」
　終いには、金田金太郎は総帥室を全力疾走していた。
　オベッカ・イッテバカリは、顔面を蒼白にし、
「……そ、総帥……」
「……BOOGA、BOOGA、BOOGA！　……BOOGAAAAAAAAAA！」
　と、金田金太郎は奇声を上げると、壁に頭を打ち付け始めた。
　壁に穴を開けてやる、と言わんばかりの勢いで自身の額を接触させる。
「そ、総帥！　お、お気を確かに！」
「BOOGAAAAAAAAAA！　BOOGAAAAAAAAAA！　BOOGAAAAAAAAAA！」
　金田金太郎は、血達磨になりながら、全体重をかけて自身の頭部を勢い良く壁に叩き付けた。意識があるのが不思議としか言いようがない。

「ヒイイイイイッ」
　オベッカ・イッテバカリは、まるで二〇ミリ弾を撃ち放つM61バルカン・ファランクス近接防御武器システムを向けられているかの様な足取りで総帥室から飛び出した。

BOOGAMANIA（004）：連絡

　世界最大のIT企業グループーーネズミコー・グループーーの若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子は、近所の奥様方らと共に最高級フランス料理レストラン『ル・トレ・トレ・スチュピード』で、豪華で優雅なランチを楽しんでいた。
　ランチの参加者は、「セレブ」という生易しい言葉では言い表せられない程のスーパー・ウルトラ・セレブたちであった。
　金田金子の真向かいに座っているのは、大手パチンコメーカーYONKYOの社長令嬢玉欝子。
　YONKYO社は、催眠効果のあるパチンコ台を開発した事でトップにのし上がったパチンコメーカーである。年商五〇〇〇億円。
　利用者は、YONKYOのパチンコ台で一度でもプレーすると、催眠効果により金をガンガン使わずにはいられなくなる。破産しても、家族を失っても、重病に患っても、埋葬されている最中でも、埋葬された後でも、YONKYOのパチンコ台の前に座らずにはいられなくなるのだ。
　利用者のなけなしの資産を容赦なく吸い上げる事で、YONKYOは大繁盛。
　YONKYO社長の時価総額は一兆円にも膨れ上がり、娘の玉欝子も令嬢扱いされる様になった。
　容貌は、屠蓄直前のメス豚そのものなのに。
　金田金子の左に座っているのが、大手菓子メーカーの黒福屋社長令嬢魔髄菓子代。

黒福屋は、ルートは縄文時代に遡るという超老舗菓子メーカーである。市民の信頼は絶大である。その信頼をいい事に、賞味期限を改竄して、返品された商品を再度出荷していた。無論、それでも返品された場合、更に賞味期限を改竄。作った商品を何が何でも定価で販売する事で、莫大な利益を上げてきた。

その利益の一部をテレビ・出版社等各メディアや、有力政治家らにばら撒く事で、消費者から改竄の疑惑の声が上がっても握り潰せる体制を築いている。

そんな事から、黒福屋社長の時価総額は数千億円にも膨れ上がり、娘の魔髄菓子代も令嬢扱いされる様になった。

容貌は、エジプトで発掘された最悪保存状態のミイラそのものなのに。

金田金子の左に座っているのが、巨大自動車メーカーのヨタヨタ社長令嬢利凍流続紀である。

ヨタヨタ社は、アメリカの三大メーカーを追い抜き、世界一にのし上がった自動車メーカーである。コストダウンにコストダウンを重ね、最低限の品質を満たすだけの欠陥車を乱造し、ぼったくり同然の価格で馬鹿でアホで脳足りんで間抜けで頓馬で唐変木でスットコドッコイでプンプクリンでアンポンタンでチンチクリンでプンプンプンでポレポレポレでフニャフニャホニャでポッテポッテな顧客に売り付けている。

お陰で、ヨタヨタ社には、資金が腐る程ある。多額の企業寄付によって政治家らや政党を買収して法律を都合のいいように改正させ（賃金不払いを法制化）、CMスポンサーとなってキー局に不祥事を握り潰させ（リコール隠し）、ライターに様々な便宜を図って欠陥製品を絶賛する提灯記事を書かせていた。

そんな事から、ヨタヨタ社社長の純利益は五兆円を突破し、時価総額は八兆円にも膨れ上がり、娘の利凍流続紀も令嬢扱いされる様になった。

容貌は、二〇ラウンドにも及ぶ顔面打撃戦を終えたばかりの常負プロボクサーそのものなのに。

玉欝子も、魔髄菓子代も、利凍流続紀も、自分らを超スーパー・ウルトラ・セレブと見なしている様だったが、世界最大のIT企業グループ――ネズミコー・グループ――の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子からすると、薄汚いホームレス同然だった。

金田金子がこの三人の阿呆共と付き合うのも、自分と同レベルの超スーパー・ウルトラ・ハイパー・ダイナマイト・セレブが存在しないからだ。

存在しない以上、ハードルを大幅に下げなければならない。

ハードルを大幅に下げなければならないのは残念だったが、逆の見方をすれば、自分がトップの座にいる、という事になる。

　まんざら悪い気分ではない。
　四人の前に、『ル・トレ・トレ・スチュピード』がお勧めする豪華絢爛な料理が運ばれて来た。
　無論、料理は比較的安い材料を美味しく見える様に調理し、法外な価格を付けたぼったくりばかりである。このレストランの評価が高いのも、オーナーがフードライターらを多額の金で買収して提灯記事を書かせているからである。『ル・トレ・トレ・スチュピード』は、ブランド力だけは何故か高いので、ブランドに目が眩み易い馬鹿でアホで脳足りんで間抜けで頓馬で唐変木でスットコドッコイでプンプクリンでアンポンタンでチンチクリンでプンプンプンでポレポレポレでフニャフニャホニャでポッテポッテなセレブ共はコロッと騙される。
　が、四人はそんな事を知る由も無い。スーパー・ウルトラ・セレブの舌も、所詮そこに転がっている下等な庶民と大差は無い。いや、庶民以下だ。
「まあ、美味しそう」
　と、金田金子は言い、フォークとナイフーードイツから取り寄せた純銀スターリングシルバー製とされているが、実は中国から取り寄せた低級ステンレス製で、食事しているだけで表面を覆っている鍍金の水銀で身体が蝕まれるーーを、手にした。
　……と、その時。

　バッグの中の携帯電話が着信音を響かせた。
　ーー何故こんな時に……。
　と、金田金子は思いながら、一カラットのダイヤ（実は工業用にも適さない低質ダイヤ）をいくつも趣味悪く埋め込んだ携帯電話を引っ張り出し、発信者を確認した。
　夫の秘書であるオベッカ・イッテバカリだった。
　図体がでかいだけの無能な黒人女性秘書。
　金田金子は彼女を毛嫌いしていたが、夫はどういった理由からか、重宝していた。
「はい、何でしょう？」
　オベッカ・イッテバカリは、微かに訛りのある日本語で、
『お、奥様！　絵瀬記念病院へ直ちに向かって下さい！』
　絵瀬記念病院は、ネズミコー・グループの資金によって建てられた総合病院だ。
　一見ゴージャスながらも、無免許者同然の者（あるいは完全に無免許の者）による治療や、患者の薬漬けや、製薬会社と結託した上で関東軍防疫給水部本部並みの人体実験を平気で行う。そういった行為により莫大な利益を上げている。病院にとって重要なのは経営であり、利益である。患者も医療保険機構もカモに過ぎない。

「な、何故絵瀬記念病院へ？」
『総帥がそこへ搬送されました』
「主人が？　何故主人が病院に？」
『とにかく、至急絵瀬記念病院に向かって下さい！』
　オベッカ・イッテバカリはそう言うと、乱暴に切った。
　金田金子は、自身の携帯電話が発酵する馬糞に置き変わったかの様な表情で見つめた。
「ご主人、どうかしたんですの？」
　と、YONKYOの社長令嬢玉欝子が、子羊とされながらも実は狗肉を都合よく調理しただけの代物を口に運びながら、何気なく訊く。屠蓄寸前のメス豚が最後の餌をそうと知らずにむさぼり食っている姿だった。
「主人が病院に搬送されたみたいですわ」
「ご主人、多忙を極めておりますからね」
　と、黒福屋社長令嬢魔髄菓子代が、フランス産の最高級トリュフとされながらも実は中国産の偽物を口に運びながら言う。エジプトで発掘された最悪保存状態のミイラが蛆虫を頬張っている様に見えた。
　金田金子は席から立ち上がった。

「今回はここで失礼しなければなりませんわ。申し訳ないですわ」
「ご主人が大丈夫だといいですわね」
　と、ヨタヨタ社長令嬢利凍流続紀が言う。最高級フォアグラとされながらも、実は魚肉を巧みに使った添加物だらけの合成物を口に運びながら。二〇ラウンドにも及ぶ顔面打撃戦を終えたばかりの常負ボクサーが、セコンドから水分補給を受けている様に見えた。
　金田金子は軽く会釈すると、『ル・トレ・トレ・スチュピード』から出た。
　外では、世界最高の腕を持つとされながらも、実は白内障と緑内障と心臓病を患っているショファーが、マイバッハ62Sの横で待機していた。金田金子の姿を見て、後部ドアを大きく開く。
　金田金子はさっさと乗り込んだ。
　ショファーが運転席に乗り込み、マイバッハ62Sを発進させる。
　マイバッハ62Sは、ドイツ大手自動車メーカーのダイムラー・グループが製造する最高級車だ。
　全長六一六五ミリ、全幅一九八〇ミリ、全高一五七五ミリの大柄な四ドアである。
　夫の金田金太郎は古風なロールスロイス・ファントムVIを、メーカーを買収してまで生産させ、乗り回している。

金田金子はそんな古臭いもの（乗り心地も良くない）には乗りたくなかったので、マイバッハ62Sを買ってもらった。

ベース価格は五〇〇〇万円だが、自分に相応しくする為金銀や宝石の装飾を施させた結果、三億円にもなった（実際には紛い物や品質の悪い宝石擬きばかりで、予算の殆どは関係者の懐に収まっている）。

マイバッハというブランド自体、ダイムラー・ベンツが自社ブランドの『メルセデス・ベンツ』を上回るブランドとして鳴り物入りで復活させたものの、同格と自負したロールスロイスやベントレーと違って販売は伸び悩み、結局一〇年足らずで廃止されてしまったが、そんな事は金田金子が知る由も無い。『高い高い車ですよ』という口先だけは超一流の販売人のセールストーク（単に売れ残った在庫を処分したかっただけ）を鵜呑みにして、購入した。

金田金子は、趣味の悪い――本人は悪いと思っていない――キンキラキンに囲まれた牛革張りのフルリクライニングシートに身体を沈めながら、夫が何故病院に担ぎ込まれたのか、と首を捻った。

――確かに、今朝変な事を口走ってたけど……。大丈夫よね？　そうよ、大丈夫。あたしは金田金子。誰もが羨む超スーパー・ウルトラ・ハイパー・ダイナマイト・セレブ。心配する事なんて何も無い……。